

特集にあたって

対比語の1つに、「メジャー (major)」「マイナー (minor)」という言葉があります。プロ野球大リーグにおけるメジャーリーグ、マイナーリーグといった使い方はよく知られています。その意味を『大辞林 (第三版)』で調べてみると、「メジャー」は“規模の大きなさま・主要な位置を占めるさま・広く知られているさま・有名なさま”，「マイナー」は“規模や重要度が小さいさま・あまり知られていないさま・有名ではないさま”と書かれています。医学の領域でも，内科・外科・小児科・産婦人科をメジャー科，それ以外の診療科をマイナー科といった使い方をされますが，何をもって2つに分けるのでしょうか。仕事が大変 vs 楽，入院患者数が多い vs 少ない，全身を診る vs 局所を診るなど，どれももっともらしく思えますが，本当のところは医師国家試験の出題の関係でいわれるようになったらしく，昔は内科・外科・小児科・産婦人科がメジャー科として毎年必ず出題され，それ以外はマイナー科として2科が選択出題されていました。

それでは，救急領域に使われている「マイナー救急」という言葉は，何を対象としているのでしょうか。いわゆるメジャー科の領域に含まれない救急疾患を「マイナー救急」と考えているのでしょうか。Philip Buttaravoli の名著である“Minor Emergencies”では，「ただちに命にかかわるほどではないが，すぐに対応しなければならない」さまざまな疾患や病態に対する救急，すなわち三大救急疾患（心筋梗塞，脳卒中，急性腹症）以外を“Minor Emergencies”としています。

救急医学の成書では重篤な疾患・病態に関する記載が中心となることが多く，いわゆる軽症に分類される疾患・病態について多くのページが割かれていることはあまりありません。しかし，ERで診療する患者の多くは軽症に分類され，そのなかに病態が重篤化するものが潜んでいることは重要なポイントです。救急医は，このような軽症の患者の相当数を「マイナー救急」として扱っているのかもしれませんが。

今回の特集では，「マイナー救急」を“全身状態に影響を及ぼす可能性は低いが，頻度は比較的高く，時に専門医の診療が必要になるもの”としました。そのなかで，産婦人科領域，精神科領域は他号に特集が組まれていますので，眼科領域，耳鼻咽喉科領域，歯科・口腔外科領域，泌尿器科領域，皮膚科領域，形成外科領域の6つを取り上げることとしました。救急科専門医を目指す若手医師が，軽症の救急患者に重大な問題が隠れている可能性を見極め，各領域の専門医に胸を張って引き継ぎができる知識・技量を身につけてもらうことを目標に，各領域の専門家に執筆をお願いしました。ERの場面で，救急医が最低限やっておくべきこと (Do)，逆に救急医が中途半端に手出しをすべきでないこと (Don't)，各診療科との連携・やり取り，転送のポイントなどを，症例を提示しながら解説していただいております。

本特集が，日常診療のブラッシュアップにつながれば幸いです。